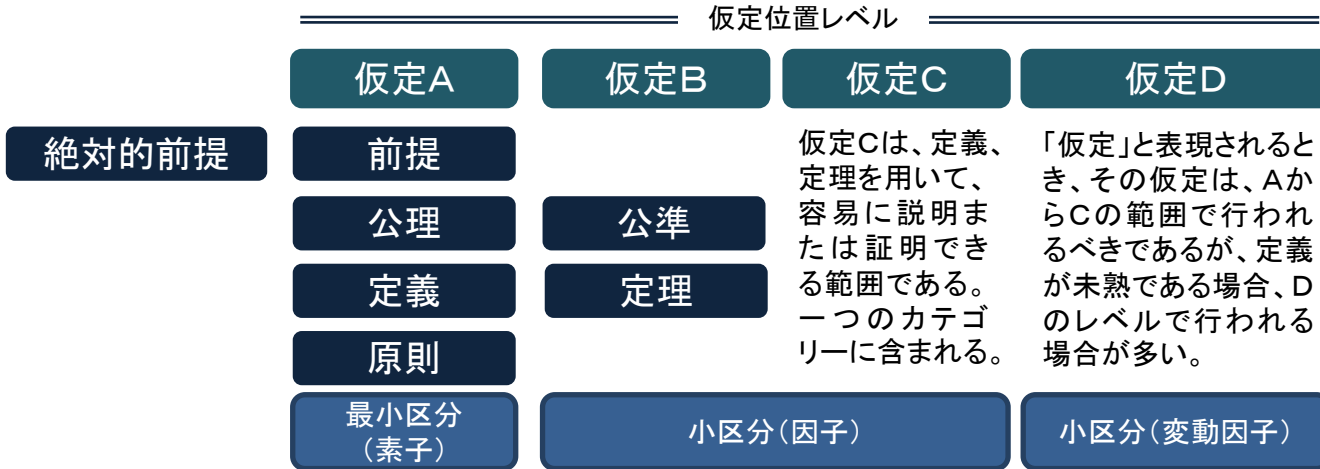


前提は知識の核になる

知識体系とは、定義、定理に従って、ある種の現象、状態について論理的説明ができる形態を示す。一つの知識体系で説明不能(証明不能)のとき、その現象は知識体系のカテゴリ外にあるか、知識体系に不足があるかである。

一つの知識体系だけでなく、複数の知識体系で説明できるとき、現象の分割と、分割された現象の関係性が証明できるはずである。関係性を説明するとき、知識体系をつなぎ合わせる異なる知識体系が必要になる。(知識を機能化させるとき、目的達成のための知識との関係知識が体系として必要になる。)知識の核になるのが、最小区分および小区分である定義と定理である。



《概念定義》
 自然科学は、自然物の観察を行う。社会科学は社会状態、制度、行為についての観察を行う。共に観察の結果を積み上げて体系化を行う。
 この形式で科学を進めていくと、現象の先へ進められない。現実があつての科学がある。知識は科学の枠よりも広い。数学では、数理論理があり、概念定義から始まる。観察を行い、実証を試みる以前に前提から始まる。進化させる知識形成は、数理論理に近い。概念定義であり、概念が、現実に影響する。未来科学として稼働し始めているのは、目的が先にきている。
 仕事の科学も同じである。

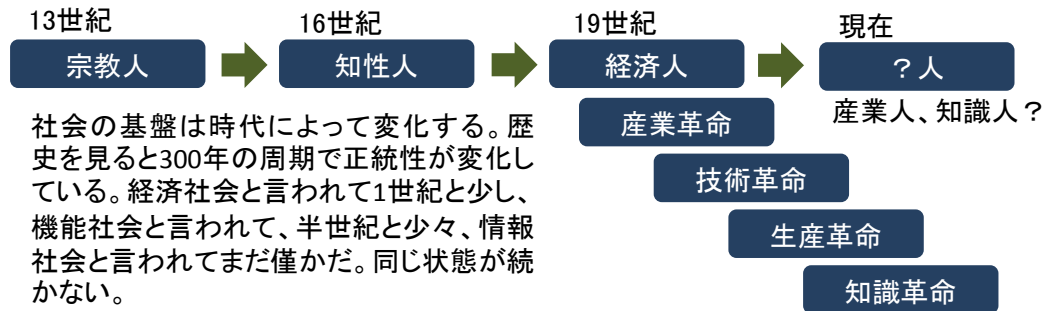
定義、公理を求める、または定めるとき時系列を含めて考えねばならない。

《原則に賞味期限があるかもしれない》

一般に原則と言われているものに、時代変化と共に変化していくものがある。原則の原則は「変わらざるもの」であるはずだが、慣例、社会システムが長く続き、そのシステムが世界で共通している場合は、原則とされてしまう場合がある。

原則には、2種類ある。一つが普遍的原則であり、他の一つが正統性での原則である。人の定義は、普遍的原則と正統性の原則がある。社会について、自由、平等、平和、発展は、普遍的原則にしてよいだろう。だが、これらの定義も進化している。

自然科学では、明瞭に分析できているところは原則にできるかもしれない。だが、新発見が原則を変える場合もある。原則のあり様は、行動に対して大きな影響を与える。



社会の基盤は時代によって変化する。歴史を見ると300年の周期で正統性が変化している。経済社会と言われて1世紀と少し、機能社会と言われて、半世紀と少々、情報社会と言われてまだ僅かだ。同じ状態が続かない。